

日本語文法(史的研究)

福沢 将樹

今期注目される著作として野田尚史／小田勝 [編]『日本語の歴史的対照文法』(和泉書院)がある(以下特に断らない限り「本論文集」)。現代の日本語と過去の日本語を「対照研究」という発想は、かつて近藤泰弘「文法研究における現代語と古典語」(『国文学解釈と鑑賞』55(7)、1990)もあった。これらは、「通時的研究」や「一般言語学的研究」とは異なるものであると思われる。

係り結びを焦点表示機能として見るアプローチは、琉球語との対照などここ数年来盛んであり、本論文集でも野田尚史「現代語と古代語の「係り結び」——焦点表示機能と主題表示機能を視野に入れて——」がある。しかし従来から気づかれていたように、これらのアプローチではヤについては上手く説明することが難しい。ヤについて本論文集では林淳子「話し手の行為について問う文——疑問文の歴史的対照の試み——」において扱われている。但し対照の相手は中古語が中心であり、上代語の木下正俊「斯くや嘆かむ」論については言及に留まっている。今後の展開が期待される。また菊田千春「複合構文としての係り結び——通時的構文文法及び機能主義的類型論からの再考——」(『認知言語学研究』6)は分裂文からのアプローチである。

かつて大野晋からいわゆる「倒置説」が唱えられた時、これは一種の分裂文説であり主題・焦点表示機能説であったが、一部ネガティブな評価が強かった。タミル語にも係り結びがあると主張された時、国語学者の多くは耳を傾けなかつただろう。『係り結びの研究』(岩波書店、1993)において主張された2系列・2類の体系は、論としては失敗していると評者(福沢)も思うが、しかし、係助詞になぜ似た意味のものが複数あるのかという問題設定には見るべきものがあつたはずである。現在大野の仕事はどれだけ継承されているだろう。大野の再評価・名誉回復が必要ではなかるうか。

福嶋健伸「アスペクト研究における形式と意味の関係の記述方法を問い直す：～テイルの発達を踏まえて」(『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す2』ひつじ書房)では、「○○という形式は、△△(という意味)を表す」という記述の仕方(表現)の根本的問題を論じる。ここには記述の手法の違いがあり、即ち「一般言語学的な手法」「個別言語学的な手法」「言語類型論的な手法」にはそれぞれ一長一短があり、このことに論者は互いに自覚的である必要があるという指摘がある。

その他、『筑紫語学論叢Ⅲ』(風間書房)、『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集』(ひつじ書房、2冊組)などの論文集、「小特集 訓点資料研究に期待すること」(『訓点語と訓点資料』146)、櫻井豪人 [企画担当・講師]「日本語史研究における洋学資料の活用例」(日本語学会2021年度秋季大会)、山田敏弘「国語教育で役立つ日本語文法を考える」(日本語文法学会第22回大会)、高山善行『日本語文法史の視界：継承と発展をめざして』(ひつじ書房)なども目に入ったが紹介する余裕がない。なお一部編者名や副題を省略した。

(愛知県立大学)

日本語文法(現代)

長谷部 亜子

2021年に相次いで刊行された以下の論集は、今後の文法研究のありかたやその可能性を示唆するという点で、共通した特徴を持ち合わせる。

- ① 嶋田珠巳・鍛冶広真編著『時間と言語』(三省堂、2021年1月)
- ② 益岡隆志監修、定延利之・高山善行・井上優編『[研究プロジェクト] 時間と言語—文法研究の新たな可能性を求めて』(ひつじ書房、2021年2月)
- ③ 庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第2巻—「した」「している」の世界』(ひつじ書房、2021年3月)

①は、言語学、哲学、神経科学といった分野から、広く「時間と言語」をとらえた論考から成る。言語学に関する論考が全体の多く(全14章のうち10章)を占め、なかでも文法研究に属するものが多い。また、他言語との対照研究もありどれも現代語を研究対象としているが、それぞれの論考がお互いに直接リンクするようなことはほぼないと行ってよい。しかし、まとまりがない論集というわけではない。それぞれの論考が、言語表現を通して人が時間をどうとらえているのかを解明したいというひとつの目標(時間学の解明)に向かっている。文法研究の成果がどのような可能性を秘めているかという点で改めて考えさせられる論集である。

②も①同様「時間と言語」をテーマにした論集である。第1部現代語研究、第2部歴史的研究、第3部対照研究の3部構成である。「文法研究の新たな可能性を求めて」との副題にあるように、どの論考も文法研究のその先の可能性を追究するものとなっている。ここでは4つの論考から成る第1部現代語研究のみに焦点を当てる。定延利之氏が単著、共著で執筆している論考3編(定延利之「パーフェクトらしく見える3つの「た」の過去性」、羅希・定延利之「「た」形変化文を発する権利のありか」、羅米良・定延利之「逸脱としての動作と変化」)は、それまでに氏が提唱してきた「発話の権利」現象およびそこに関与する「会話場」を言語分析に取り入れることの妥当性を一層強固なものにする論考である。このアプローチは、例えば主文末にあらわれる「た」形にテンス性とは別にアスペクト性を認めるとする従来の主張に対し疑問を投げかけるものであり、氏はこれまでも多くの論考を発表している(上記③の論集にも2編ある)。小林ミナ「「タ形」の意味をめぐる議論を日本語教育から考える」は、日本語教育の立場からこれまでの文法研究全般のありかたを問い、どういった文法研究の成果が実際の日本語教育の現場で必要とされるべきなのかを問い直すものである。上記「た」形の議論を引き合いに、従来の研究成果と、定延氏のアプローチによる研究成果のどちらが日本語教育に有用であるかを検証している。

③は「した」と「している」に特化した、テンス・アスペクトの研究論集(全13編)である。様々な領域の論考から成り、文法研究の可能性と発展性を期待させる。

(愛知学院大学(非))

日本文学研究(古典)

野本 東生

文学研究に身を置いていても、語法上の違和感などを言語表現の不完全性に押しつけてつい放置しがちであるが、じつはそれが文章表現を支える根幹であることは多い。2021年に発表された研究成果のうち、稿者が興味を引いたものについて紹介したい。

奥野陽子「初期歌合における文字遊び—「をみなてし」を中心に」(『国語国文』90-7、2021年7月)は、『亭子院女郎花歌合』を軸に折句や物名などの言語遊戯のあり方を探る論で、条件を満たさぬように見える歌句も、その難度ゆえに意味や音韻などで幅を持たせて許容されていたという実態に迫るものである。なかでも書き記された和歌の文字を凶形として捉えることで、「て→へ」のような読み替えを可能にし、題意の成立を見込む部分が面白い。複数文字利用という二重性累乗の混沌も妄想してしまう。

小田勝『百人一首で文法談義』(和泉書院、2021年9月)は、古注からの論点を整理しつつ、語学研究の立場から『百人一首』を解釈する。語学的な蓋然性を欠く解釈の指摘は特に重い。句読点、カギ括弧を付すのも真新しい印象で、構造把握を徹底する姿勢が鮮明である。あとがきでも触れる小野小町歌は第三句末に句点を入れるが、「いたづらに」〈時を過ごす〉という和歌のコロケーションを採れば、連体修飾の訳出にも支障ないか見え、蓋をしていた疑問を向けたくなるような刺激に溢れる。岡村弘樹「形容詞型の活用とミ語法」(『国語国文』90-3、2021年3月)の論旨を支える、動詞「ミル」に由来して視認性を含むという仮説や、コ系列とソ系列の指示代名詞を話者の世界の内側と外側で弁別する岡崎友子「上代の指示代名詞について」(『国語と国文学』98-12、2021年12月)なども、耳慣れた『百人一首』を挟むと身近になる。

半沢幹一『土左日記表現摘記』(笠間書院、2021年6月)は、冒頭・構成・引用・文頭・文末・主語・指示・会話・和歌・対比の十章から、仮名散文の始発と捉えて、『土左日記』が表現を獲得していく様相を描出する。指示表現に関わる分析から変体漢文の影響を限定的に見るなど、基本的な表現分析を掘り下げて、その射程を広げていく。

佐藤武義編『古代の語彙—大陸・貴族の時代—』(朝倉書店、2021年7月)は、各章をつなぐと通史的な使用語彙層の変遷が数量的な分析から見えてくる。

東原伸明「『源氏物語』「野分」巻の言説分析—「同化」と「離化」・〈語る〉主体の位置と距離の測定—」(『国語と国文学』98-8、2021年8月)と本廣陽子「『源氏物語』における「～ゲナリ」の一特質—物語技法の一つとして—」(『日本文学研究ジャーナル』17、2021年3月)とは、語り手視点と登場人物視点の重なる現象を、別観点で浮き彫りにする。表現主体の重層化は、享受者や情報引用にも及ぶ問題である。

阿部泰郎「聖西行の駆使する歌の力—詠歌をモノに書き付けること—」(『西行学』12、2021年10月)は、中世説話的観点から歌を書き付けるという行為表現を捉える。

「表現」はどこにでも成立するがゆえに、多くの視角が求められること、同時にその「表現」の認定や分析に慎重さが求められることを身につまされた。(北海道大学)

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

瀬崎 圭二

2021年に刊行された日本近現代文学の研究書を紹介しながら、その研究動向を以下に整理したい。

近年、作家の事典類が頻繁に刊行されているような印象があるが、その傾向は2021年も続いているようだ。まず3月に落合教幸、阪本博志、藤井淑禎、渡辺憲司の編集による『江戸川乱歩大事典』が勉誠出版から刊行された。この事典の特徴は、乱歩個人のみを対象とするのではなく、作家や物語を取り巻く社会状況や、関連するミステリー、メディアの状況も項目に取り上げている点にある。このような形式は、作家の事典のそれとして定着した感もある。4月には遠藤周作学会の編集による『遠藤周作事典』が鼎書房から出版された。遠藤周作は、その知名度や読者数の割には、研究が作家の枠を越えて展開していないように思われるが、この事典はその問題を解決する土台となるであろう。事典ではないが、11月には井上隆史、久保田裕子、田尻芳樹、福田大輔、山中剛史の編集による『三島由紀夫小百科』が水声社から刊行された。この中には「主要作品事典」が設けられており、その他の諸論考と共に、かなり専門的な情報を読者に提供している。事典類は、専門的な研究成果が一般読者に伝達される回路ともなり得るため、今後も充実した内容の事典が刊行されることを望む。

個別の研究成果としては、5月に論創社から刊行された小正路淑泰『堺利彦と葉山嘉樹 無産政党的社会運動と文化運動』が目にとまった。著者は日本近現代文学の研究者ではなく、政治史、社会運動史の専門家だが、この書の第Ⅱ部に掲載されている葉山嘉樹についての研究成果は貴重だ。作家葉山嘉樹についての事実はまだ知られていないことも多いため、この書に掲載されている葉山の未発表資料はその空隙を埋めるものとなるであろう。葉山の小説どころかプロレタリア文学自体があまり読まれていない現状において、同月に『葉山嘉樹短篇集』や、10月に『黒島伝治作品集』が岩波文庫から刊行されていることも興味深い。

9月に岩波書店から刊行された十重田裕一『横光利一と近代メディア 震災から占領まで』と、12月に東京大学出版会から刊行された安藤宏『太宰治論』は、長年の研究の集大成である。両者は横光利一研究、太宰治研究の中心人物であるだけでなく、日本近現代文学研究の方法論を切り開いてきた方たちでもある。この二冊の書物の刊行に深く敬意を表したい。これらに、11月にひつじ書房から刊行された松本和也の『文学と戦争 言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』を加えれば、昭和文学研究の現状がより多角的に捉えられよう。

なお、2022年度から実施される高等学校の新学習指導要領によって国語の教科に「文学国語」が新設されることになるが、このことをめぐって、2021年は日本近現代文学の研究者からも多くの提言が見られた一年となった。この問題は継続して注視すべきであろう。

(同志社大学)

国語教育

山田 文美

本稿では、2021年の国語科教育分野の動向について報告する。

全国大学国語教育学会編集の『国語科教育』第89集では、河上裕太「学習者の『解離』が示す文学教育の課題と可能性」が研究論文として掲載され、文学教材に関する教室の読みと自分自身の読みとが解離する現象及びその構造について論究している。その解離を課題であり可能性でもあるとしているところに特徴がある。また、萩中奈穂美の実践論文「『語彙学習力』育成のための実践的研究—表現学習における語彙指導の意義と方法—」では、人物像を伝える文章を書く学習における語彙の「マップ」づくりの活動を提示している。この活動は具体的な表現対象と照らした語彙の体系化に有効であり、「語彙学習力」を高めることに繋がったとの成果がまとめられている。

『国語科教育』第90集では、春季大会(第140回 オンライン大会)のシンポジウム「古典の学びを国語科教育学はどのように捉えるのか」(コーディネーター：内藤一志・菊野雅之、提案者：藤森裕治・難波博孝・前田雅之・三上英司)の報告がなされている。素材としての古典の現代的価値について多面的に検討がなされ、古典研究と国語教育研究の架橋の必要性についても言及されている。

解釈学会編集の『解釈』5・6月号(特集 国語教育)では、作文指導に関する論文が2編掲載されている。松崎史周「児童・生徒作文における条件表現の出現状況—『手』を題材にした作文の場合—」では、「と」「ば」「たら」「なら」の4形式の条件表現に着目し、児童・生徒の「手」作文の分析を行っている。これをもとに論理的文章表現力の育成について考察し、「読むこと」と「書くこと」との関連や思考との関わりについても言及している。王培「写真を教材とした作文指導の試み—看図作文を取り入れた実践に即して—」では、中国の伝統的な作文の指導法「看図作文」をもとに、大学生を対象にした看図作文の授業実践の報告がなされている。「看図作文」とは、絵図を読解し、読解した内容を文章によって表現するものである。この活動は学習者の表現意欲を喚起する効果があり、特に「対比性」を持つ写真を使うことでの有効性が示唆されたとしている。

日本国語教育学会編集の『月刊 国語教育研究』9月号特集「多様な教材を活用した『読むこと』の指導」では、甘楽裕貴「翻訳作品を使用した『読むこと』の指導—翻訳作品を読み比べて表現の違いを味わおう—」など、多様な文章表現に着目した具体的な指導例が提示されている。8月号特集「新しい時代に生きる語彙の学び」では、開田晃央「オンライン上の語彙資産を生かした単元構成」、北村卓也「ICT活用による学習者が言葉を実感する試み」など、ICTを駆使した新たな言葉の学習の提案がなされている。

2017(平成29)年改正の学習指導要領が小・中学校ですでに全面実施されており、2022年度からは高等学校において年次進行で実施される。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けては、表現の観点からのアプローチが不可欠である。

(中部学院大学)

日本語教育

田中 啓行

『日本語教育』178号の特集「日本語教育学の輪郭を描く」の中で、田中祐輔・川端祐一郎「『日本語教育』掲載論文の引用ネットワーク分析——日本語教育研究コミュニティの輪郭描写——」(pp.79-93)は、『日本語教育』1号から175号(1962年～2020年)の掲載論文とそれらの論文中で引用された文献を分析している。その結果、「近年、文献引用傾向の変化の速度が増しており、また実際の教育に関心を向けた研究の増加が一貫した傾向となっている」とし、この傾向は合理的であるとしながらも、研究の継承性や各種の研究成果、動向を参照して研究分野の発展性を追求することの重要性を指摘している。『日本語教育』に掲載された表現学関連の論文をみると、例えば、市江愛「モシは日本語条件文の理解を促進するのか—自己ペースの読文実験を用いた文処理過程から—」(178号、pp.94-107)は、自己ペース読文実験を行い、日本語母語話者の条件文の理解には影響を与えないモシが日本語学習者の文処理を促進することを示している。また、金井勇人「作文におけるア系の指示詞について—《非—共同的共有知識》という観点から—」(179号、pp.16-30)は、日本語学習者にとって習得が難しい、「発信者と受信者が共同の文脈を持たない(実世界において何も接点を持たない)状況において、それぞれ別の経験を通じて得た共有知識」を指すア系の指示詞の文法的な性質を「非—共同的共有知識」という概念を導入して分析し、日本語教育における扱いについて論じている。これらの論文は、日本語学などの知見をふまえて、他言語との比較や母語話者と日本語学習者のデータの分析を行い、日本語学習者の理解や習得の観点から新たな知見を提示するものといえるであろう。

また、早稲田大学日本語学会編『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集 第1冊』『同 第2冊』(ひつじ書房)は「早稲田国語学・日本語学」の流れを受け継いだ学会の会員による論文集であるが、日本語教育に関しても論じられており、日本語教育における研究の継承性、発展性という面でも意義がある文献だと考えられる。

最後に、そのほかの動向に関する文献を2点紹介する。李在鎬編『データ科学×日本語教育』(ひつじ書房)は、コーパスをはじめとしたデータを用いた量的研究の方法論と音声、文字、語彙、文法、文章などを分析対象とした研究事例をまとめており、量的研究が拠って立つ理論と研究動向を知ることができる。また、森篤嗣「書き言葉におけるテル縮約形と日本語教育」(金澤裕之・川端元子・森篤嗣編『日本語の乱れか変化か これまでの日本語、これからの日本語』ひつじ書房、pp.199-217)は、書き言葉のコーパス2種によって、「～ている」の縮約形「～てる」の書き言葉における使用実態を調べ、学習項目として取り上げる必要性と注意点について論じており、いわゆる「逸脱」や言語変容を日本語教育でどう扱うかを示すものである。

本稿では筆者の力不足により数編を挙げるに留まった。方法論の変遷や言語変化などに目を配りながら、先人の研究を継承した成果が重ねられることが期待される。

(中央学院大学)

英語学

長谷川 明香

2021年、英語学、表現学との関連で最も注目すべき書籍は平沢慎也著『実例が語る前置詞』(くろしお出版)であろう。認知言語学が掲げる使用基盤モデルを徹底的に実践する氏の研究姿勢は、前作『前置詞byの意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』においてすでに強く打ち出されているが、本書は研究書兼学習書という形でそれを一層推し進めている。具体例を材料に理論的主張をなすというよりは、理論を背景としつつも、出会った生きた英語を母語話者のように使うために必要な知識とは何かを追究し、その実体の一端をきめ細かく明快に教えてくれる。例えば、awayには“… were cheerfully chatting away”「…は陽気にべちゃくちゃ喋っていた」のような、「離れて」という意の基本的用法とは一見無関係な例も存在する。基本的用法との繋がりも説明されるが、その一方で、それだけでは決して母語話者と同じようには英語を使えず、非常に細密な知識([無駄話[æ]動詞1語+away)で「外界とは切り離されたようにして、自分の世界に入り込み、無駄話に没頭する」、chatter away, chat awayは特に多い…等々)が不可欠であるということが示されている。

北村一真著『英語の読み方：ニュース、SNSから小説まで』(2021、中公新書)は、真の意味での英語を読む力がいかに英語習得に重要であるかを説いた良書である。英語の文章構成や各文のポイントの丁寧な解説、インターネットを活用した学習法の紹介等、コンパクトながら充実した内容、情報量となっている。

以下の2冊は英語学者によるものではないが、英語学および日英語対照研究の観点から学ぶべきところが大きく有益である。

長部三郎著『伝わる英語表現法』(2001、岩波新書)が2021年夏に復刊され話題を呼んだ。本書で扱われる「世界情勢」と“what's going on in the world”や「当社の特徴は…」と“What makes us different is …”等に見られる日英語の差異は、池上嘉彦氏が好まれる言い回しに関する研究の中で主張している「日本語はコト(動詞)的、英語はモノ(名詞)的である」という傾向性と対立するものであり、理論的にも興味深い。

柴田元幸編・訳・註の「英文精読教室」シリーズ(既刊4巻、全6巻の予定、2021年～、研究社)は、英語小説の原文・日本語訳を見開きにまとめたもので、精読に値する英語とそれに対応する自然な日本語の宝庫と言える。丁寧に註も付されており、語句の意味やニュアンス、作品の味わいにかかわるものまで幅広い。例えば“Who's out in the kitchen?”(第3巻)はカウンターで食事中的客が発した言葉である。話し手のいる場を中心としてそこから外れていることをoutで、その次に具体的な場所をin the kitchenで指定するという構造で、平沢氏の上掲書第1章「位置の2段階指定」の好例であると言える。さらに「キッチンに誰がいる？」という柴田氏の訳は日本語において英語ほど2段階指定が好まれないという平沢氏の考察と見事に呼応している。

以上のように2021年は、好まれる言い回しに関する英語研究の豊かな成果が日本の一般読者の手にとりやすい形で世に出た年であったと言えるだろう。(東京造形大学)

認知言語学

田村 敏広

認知言語学は理論的深化・精緻化を進めながら、同時にその学際性を確実に高めている。認知言語学のこのような潮流の中、2021年にはどのような動きがあったのかを振り返ってみたい。

構文文法は認知言語学分野の中でも特に注目度の高い理論であり、この枠組みでの研究は非常に盛んである。2021年の日本認知言語学会ではMartin Hilpert氏による構文文法をテーマとした特別講演（演題：The road ahead for Construction Grammar: Connections, controversies, and collaborations）が開催され、構文間のネットワークの精緻化や理論的に未解決な問題が話題として取り上げられた。今後、構文文法理論の更なる深化・精緻化が期待される。また、構文文法理論にとっては、Adele E. Goldberg (2019) Explain Me This: Creativity, Competition, and the Partial Productivity of Constructionsの翻訳である、木原恵美子他訳(2021)『言えそうなのに言わないのはなぜか—構文の制約と創造性—』(ひつじ書房)が出版された意義も大きい。本書は、構文文法理論を基盤として、構文ネットワークの構築・獲得がどのようになされるのかをコーパスデータや実験を基に検証している。構文文法、使用基盤モデルといった認知言語学の諸理論から心理言語学分野にまたがる横断的研究であり、認知言語学の学際性への貢献は大きいであろう。

また、出原健一(2021)『マンガ学からの言語研究「視点」をめぐって』(ひつじ書房)も認知言語学の学際性の高さを示すものである。本書は、認知言語学の視点論の知見を用いて漫画の分析を行なっている。特に、漫画のルビの分析は興味深い。客観的把握に基づいた表現に主観的把握に基づいた表現のルビが振られることで、読者に同時に複数の「見え」を提供し、作品世界への没入を促すのだという。本書は認知言語学を基盤としたマンガ学の新しい方法論を提案しているだけでなく、認知言語学がメディア分析、また他の領域にどのように広がりうるのか、その秘められた可能性を教えてくれる。

近年の認知言語学における学際化の進展が目覚ましいのは間違いない事実であろう。このような進展の中だからこそ、山梨正明(2021)『言語学と科学革命 認知言語学への展開』(ひつじ書房)は非常に重要な意味をもつ。本書では、構造言語学から、生成文法、生成意味論、そして認知言語学へのパラダイムの展開が広い視点から記述されている(第1章～第5章)。認知言語学が学際性を高めてきたからこそ、改めて認知言語学を過去から見直し、未来への展望を考える必要があるのではないか。加えて、第6章「言語科学の新たな展望」では、認知言語学の開放性と他領域への適用性の高さが高い学際性を生み出していること、また、認知言語学の言語理論としての健全性をどのように保っていくべきかが論じられている。本書は、認知言語学者・認知言語学を志す者に、「これまで」と「これから」を教えてくれる意義深い一冊であろう。

今後も認知言語学は確実に学際化の道を進んでいく。認知言語学がその健全性を保ちつつ、どのように形を変えていくのか注視していきたい。(静岡県立大学)

修辞学

水藤 新子

学際的領域である修辞学においては、2021年度も多岐に亘る研究成果が得られた。

①鷺見幸美・松浦光「概念メタファー理論に基づいた教科学習支援—抽象語の理解に向けて—」(『名古屋大学人文研究論集』4)は、「抽象語の理解につまずき、教科学習に困難を覚え」がちなCLD児＝「多様な言語背景を持つ子どもたち」について、教師・学習支援者が学校教科書の記述に「概念メタファー理論」に基づく「メタファー表現」が多用される実情を意識することで、効果的な指導法につながると指摘する。②小泉健輔・半澤諒・谷竜太・植松敬太「国語科との教科横断的な視点を取り入れた算数科授業に関する事例的研究—第5学年「数量の関係を表す式」における比喩表現の生成と解釈を軸とした学習活動に焦点を当てて—」(『群馬大学共同教育学部紀要 自然科学編』69)は、算数科での「□や△を用いた式」学習に先んじ国語科で「わかりやすく伝えるための表現」比喩を学び、生徒自ら「喩えを使って」式内の「□」が「未知数」かつ「変数」だと理解するに至った「互恵的」授業の実践報告である。③矢吹康夫「履歴書に顔写真は必要か?—Twitter投稿の計量テキスト分析とレトリック分析—」(『立教大学大学院 社会学研究科年報』28)は、「公正な選考のため」履歴書から性別に続き「写真欄もなくそう」キャンペーン(2020年9月～)への反論＝「対抗クレーム」全11,895件中引用リツイートを除いた3,352件について、計量テキスト分析で頻出語と文脈の関連性を確認しレトリック分析で「反論パターン」7類型を抽出した。安本美典・樺島忠夫以来の計量的文体分析法だが、SNS全盛の現代新たな需要を生んだ感がある。④塩野麻子「疫病を読みなおす視点—新型コロナウイルス禍と「戦争」の比喩—」(『Core Ethics: 立命館大学大学院先端総合学術研究科』17)は言語学とは別領域の研究者による僅か2ページの批評だが、「戦争状態」(マクロン)や「大戦以来の挑戦」(メルケル)などの比喩が、「不条理」の下「国民に一致団結を求め社会統制を容認させるための用法」に置き換わり得る危険性を指摘し、安直な表現の受容や拡散への警鐘を鳴らす。⑤石崎博志「疫病対策の比喩と表現—レリアによる中国語教育の一環として(4)—」(『日中語彙研究: 愛知大学中日大辞典編纂所』10)も「Covid-19に関連する中国語表現」について短編動画コンテンツを調査し、「感染地」を「戦場」、「治療、封じ込め」を「勝利」、「科学技術、団結」を「武器」など〈防疫は戦争〉とのメタファー成立を確認した一方、日本の公文書ではこうしたメタファー使用が抑制されているとの見解も示した。⑥ポリー・ザトラウスキー編『五感で楽しむ食の日本語』(くろしお出版)は、グルメから介護に至るまで「食にまつわることと日本語の関係を様々な観点から考察する」論文集である。中でも⑦水藤新子「レシピのオノマトペ—調理の手法を伝える表現—」は、「さっ」「こんがり」「ぐつぐつ」など調理手順の説明に頻出するオノマトペの諸相(種類、共起状況、感覚領域との相関など)を調査、広告で多用されるシズルワードは完成品＝「結果」を提示し「おいしいを感じさせ、食べたいという欲求を生み出す」表現、こちらは調理で「一皿に至る道標を与え、意欲を支え、鼓舞する役割をも果たす」未然」の表現であると捉え、オノマトペ使用の意図と表現効果について新たな観点を示した。(中央学院大学)

文章・談話研究

立川 和美

2021年は、文章・談話において具体的な言語要素がどのように機能しているのかを深く掘り下げる研究と、様々な視点からのアプローチをまとめて総合的に文章・談話の姿を明らかにする研究といった双方向から、充実した成果が発表された。本稿では、こうした中で稿者が表現学や表現論に深く関わると感じた研究を紹介したい。

まず前者としては、高崎みどり『テキスト語彙論 テキストの中でみることばのふるまいの実際』（ひつじ書房）がある。ここでは、「テキスト構成」に寄与する語として「テキスト構成語」を仮設し、テキスト展開に関わる語彙的結束性などの概念について、漢語や外来語、指示語の機能などから分析が行われている。文脈の流れの中での語彙の働きが多角的に考察されており、示唆に富んだ研究である。

後者としては、ポリリー・ザトラウスキー編『五感で楽しむ食の日本語』（くろしお出版）がある。日本語教育研究と関わりながら、「食」をテーマとした文章・談話が、表現論や文体論などの観点から分析されており、本領域における多くの方法論とその成果を示した研究書として注目される。具体的には、味や香りを表すオノマトペや、食の評価を示す言語（非言語）行動などに関する調査が収められ、非常に興味深い。

同様に、李在鎬編『データ科学×日本語教育』（ひつじ書房）でも、学術的文章の構造や接続表現、文章の分かりやすさなど、多種にわたる計量的な分析が行われている。2020年以降、国立国語研究所等による大規模コーパスの整備が進められているが、そうしたデータを活用した研究における理論の展開を意図した意欲的な研究書である。

この他、日本語の文章・談話に特有のジャンルを扱った研究として、雑誌『日本語学』40(1)(明治書院)では、「ポップカルチャーの日本語」という特集が組まれた。これまで標準的な日本語を対象とした談話研究においても、「役割語」や「ヴァーチャル方言」、「キャラ語」など多くのユニークなスタイルを形成する要素が提示されてきたが、ここでは漫画やライトノベル、落語などのポップカルチャーというジャンルに特化した文章・談話分析が行われている。こうした日本語の文章・談話に特有のジャンルに関する研究は、今後、活発化するものと考えられる。

これまでの成果を発展させた研究としては、小説テキストを分析する上で重要な「視線」の概念を用いて、テキスト参加者の立場からその表現と理解の仕組みを丁寧に議論した野村眞木夫「物語テキストにおける視線の表現」『上越教育大学研究紀要』40(2)(pp.559-567)や、ニュース談話に対して「読みことば」という位置づけを行い、戦前・戦中のニュース分析なども含めて広く観察した井上裕之『ニュースの談話構造の総合的研究』（ココ出版）など、着実な積み上げも多くみられた。

文章・談話の研究方法は非常に多面的であるが、COVID-19の影響によるオンライン言語の広がりなどから、今後は扱う対象も多様化が進むであろう。新たな研究成果と、更なるその深化・拡充が期待される。最後に、稿者の力不足による不備があることをご寛恕願う次第である。

(流通経済大学)